

会 議 報 告 書	
会 議 名	令和元年度第2回草津市社会教育委員会会議
日 時	令和元年9月25日(水) 自 10時00分 至 12時00分
場 所	草津市役所6階 教育委員会室
出 席 者	委員：横山委員長、岸本副委員長、伊庭委員、浜田委員、北川委員、 飯田委員、内田委員、鈴木委員、小寺委員、湯浅委員、山本 委員、永野委員、武井委員、大東委員 事 務 局：生涯学習課 相井課長、矢野係長、奥田主任 傍 聴 人：2名

1. 開会

2. 報告

1) 滋賀県社会教育連絡協議会の運営方法見直しについて

【事務局】

《滋賀県社会教育連絡協議会（事務局：滋賀県教育委員会事務局生涯学習課）の運営方法見直しについて滋賀県の検討結果を報告》

見直し原案

- 理事会と評議員会の1本化による会議回数減
- 規約改訂
- 研修会や情報交換会に重点をおいた運営方法
- メーリングリストなど、新たな手法を用いた情報共有や情報提供
- 全国社会教育委連合への令和2年度の加入（継続）
- 補助金、市町負担金の現状維持

3. 議事

1) パイロットモデルの取組状況について

【事務局】

前回の会議以降、現在までの取組状況について

■老上学区の取組

◆カレンダー委員会

2回の写真講座

学区民対象に、「老上再発見フォト」を10月31日まで募集中

- ◇写真講座参加者にも応募を促すことで、カレンダーに関わる人を増やす
- ◇地域の良さを再発見

◆紙芝居委員会

紙芝居作成方法の講座を追加設定

- ◇委員が学びを深めるとともに、新たにかかわる人への助言を行う
- ◇学習ボランティア登録制度「ゆうゆうびとバンク」活用

◇ 周知には市 F a c e b o o k、デジタルサイネージ活用
2つのグループでの制作活動

・ 説話の紙芝居

歴史講座に続き、地域に伝わる説話「おおかみと大かめ」の紙芝居制作
切り絵を用いる

- ◇ 切り絵制作の参加者を地域の広報誌で募集、関わる人を増やす
- ◇ 紙芝居を通して昔の風景や道具などを、子どもたちに伝える

・ マスコットキャラクター「おいかめちゃん」秘話

小学生が物語から制作、物語に合わせた絵も、小学生が担当

- ◇ 図書委員会の担当教員と、紙芝居委員会のメンバーがサポート

◆ カルタ委員会

防災3連続講座

防災に関する読み札の募集（学区民対象）

子ども宿泊体験「防災キャンプ」にて、読み札作成

- ◇ 読み札が集まるとともに、学習の定着にもつなげる
- ◇ 参加した子どもたちが、自分たちが関わったカルタでの遊びをとおして、他者への防災への学習意識を広げ、また防災への意識や知識の向上を図り、万が一災害が起こった際には、自らの身を守れるようにと、考えられた

◆ 全体

3委員会合同委員会

■ 老上西学区の取組

8月3日「スマホやネットに潜む危険から子どもたちを守る」

対象：中学生とその保護者

- ◇ 参加者を同じ中学校区である老上学区にまで広げる
- ◇ 周知には市 F a c e b o o k、デジタルサイネージ活用

【委員長】

草津市に限ったことではなく、公民館を地域まちづくりセンターとし、まちづくり協議会などの自治組織に指定管理者制度を用いて委託する方式は、いい面もあるが課題もある。担い手づくりという視点が大きく欠けていた。公民館で行われたような人づくりと地域課題解決に結びつく人づくりを両輪で進めなければ、コミュニティが疲弊するばかりと考え、前期、「みらくるカレッジ」構想という大きな学習体系を提案した。なかなか一度には進まないため、今年度はモデル実施しているという前提を踏まえ、皆さんの御意見をいただきたい。

【M委員】

自治連合会から地域に関わったが、事業に参加し、まちづくり協議会の考え方がわかりつつある。地域をどうしていくかという考えを持った人が集まっているかどうか問題かと思う。俯瞰的な目で地域の問題をどう捉えるか、そういった人材をいかに育てていくか、時間をかけざるを得ないと思う。人の関わりの創出が重要、と感じる。

【S委員】

地域活動に参加したくないと感じる方は多いが、まちづくり協議会の活動などに参加することで変化がみられる。まちづくり協議会のコンセプトを明確に伝え、若い人たちにも参加していただくことが、双方にとってメリットとなるという発信が足りないのではないかと思う。一方で、「見える化」しなければ協力を得られないと分かってきた。防災や子育てなど、全体が一つになって受け止めていこうという雰囲気作りが必要と感じる。

今回のこのパイロットモデルは素晴らしいと思う。SNSの活用は、今の時代にマッチしている。

【P委員】

まちづくり協議会を通して委員を募集すると、地域の役員の立場で来られる方が大部分であり、1年ないし2年で交代となるため、目的そのものをレクチャーし、当事者意識を持たせるところから始めざるを得ないのが現状。パイロットモデルについても、キーマンとなる方、継続して活動できる方を育てることが一番重要だと思う。地域の実態に合わせたいというコンセプトのもと、モデル地区が2つあるのであれば、2つの違いを明確にし、それぞれの活動の展開が見られれば、他学区への展開にあたっても有益なのではないか。

【R委員】

モデル事業の評価や行政の支援については、中間的データの収集が必要だと思う。どのような参加傾向であったか、反応はどうであったか、事業前後の違いの聞き取りなど、中間的なデータを収集し、横断的な認知につながるよう、活用ができないものかと思う。データ収集は大変だが、具体的に数値化するとよいのではないか。

【U委員】

老上学区での取組は、自分たちが地域の中にいるということ、子ども自身が認識できる。小学生だけでなく中学生も関わるなど、学区全体で盛り上げようとしていると感じる。子どもたちが地域との関わりが希薄になっており、地域の方々が子どもとの関わりを望んでも、子どもたちの方が、時間がない。お金を出しているいろいろなことを経験しても、地域での事業への参加がなかなかできないということ、日頃小学生たちと接していると思う。このような機会が、親にも伝わったり、地域との距離が近づいたり、子どもたちが大きくなって、自分たちもこういう活動に関わって育ってきた、と自分の子どもに伝えられるように活動が継続すればと思う。

【V委員】

子ども会指導者連絡協議会やPTAなど、子ども関連の組織の役員をこの何年間かやらせていただいているが、他市のある学校では来年からPTA活動をしないかもしれないという話を聞き及んだ。子どもたちは学校にも所属しているが、自分が住む地域が次の社会であると考え、子ども会、町内会といった各団体の横のつながりが強ければ、子どもは安心して学校に通えると思う。老上学区で子どもが関わっていく過程をわかりやすく説明し、他地域でも活用できるような形が作れば、と思う。

【L委員】

モデル学区の要請先は、まちづくり協議会の会長か。地域により、様々な既存組織が存在するが、実際に活動しているのは、新しくプロジェクトを組んだメンバーか。

【事務局】

行政が地域を回り、パイロットモデルへの協力を求めた形である。昨年度、すべての学区でヒアリングをさせていただいた。また、市議会からも、14学区それぞれの違を調べてから動くべきだといった御意見をいただいた。

活動しているメンバーは、まちづくりセンターの職員による地域の方へのお声かけや、広報誌等の募集により各委員会に入った方と伺っている。

子どもの関わりについては、委員の一人が、お子さんを連れて委員会にこられた際に、子どもが興味を持ち、自分もやってみたい、友達も連れてきたいと、5名ほどが集まった。その後、学校にも声をかけ、委員会活動の中で活動する形になったと伺っている。

このような取組においては、最初の枠組みから外れると実施されないことが多々あるが、老上においては、既定外のことが起こった際に、スピニアウト事業として、積極的に受け入れられたことが功を奏したと見ている。当初の人集めの際には、事務局は正直苦勞された。既存組織への声掛けとともに、駅前マンションに多様な方がいらっしゃるため、その方たちにもお声かけをされたようだ。そこから、友達を連れてくる人などが増え、新しい発想が出てきたときに、会長は、やってみようと言ってくださった。この地域特有の事情もあると思っている。

【L委員】

パイロットモデルは、今後、各学区に広げていく予定か。

【事務局】

優良事例を集め、こういった取組で関わり方が増える、といった情報発信により、拡大再生産したいと思っている。

今、どこの学区も担い手不足で苦勞されている。高齢化、固定化している部分と、これまでの主戦力だった女性の社会進出などにより、なかなか地域で活躍いただく時間がない方が多い。業務を細分化し、興味・関心のある部分や、隙間時間での関わりへの創出が、今後の社会教育のアプローチではないかと考える。

老上学区は、情報誌の中で、今回の委員が情報発信し、活動自体を知っていただく取組みを進めている。子どもへの呼びかけについては、スクールガードをされている委員が、登下校時に呼びかけを行うことも考えていると伺っている。

【I委員】

パイロットモデルの行政の支援のあり方について、財政、人的支援等があげられているが、人的支援というのは難しいものだと感じている。地域の問題とともに、全体の問題がある。コミュニティ支援施設で利用者を見ていて思うのは、やはり高齢化。80代、90代が当たり前で、そういった方々の生きがい、モチベーション作りが、私たちの大きなミッションになっている。人生100年時代において、今の50歳は、

昔の25歳くらいのイメージになってきた。どこを見ても、高齢者ばかりのように言われコミュニティの比率としてはいびつな構造になってきているが、元気な方は、人的資源としてまちづくりの担い手になっていただく。

老上の取組において、デジタルサイネージ、Facebook を使った募集をされているのを見た。いろいろな情報チャネルを使い、若い方を引き込もうとする仕組みはよいことだと思うが、社会の人口バランスに合わせたまちづくりのあり方も、行政として考えなければならないのではないかと感じる。

【G委員】

組織の名称は様々だが、14学区それぞれの代表が集まり、自分の学区のまちづくりセンターでのポジションや活動などを情報交換すると、活発にやっていると感じられるのが、今回、名前の挙がった学区である。自分の学区でパイロットモデルを実施するという話になったとすれば、誰が、どのように進めていくのかを考えると、うまくできるのかどうかと思う。子どもが関わる事業について、PTA、子ども会が今、ボランティア活動に目を向けていただける機会が少ない状況だが、次は、青少年育成区民会議になってくると思う。働いている世代の方に事業への関わりをお願いしようと思うと、なかなか時間が取れないこともあり、子育てよりも孫育て世代の方に担ってもらっていく方がいいのかと思ったりもしている。担い手づくりについて、組織検討委員会の立ち上げや、規約の変更などを行っているが、まちづくり協議会や各団体に興味をもち、少しでも手伝ってあげようと、いろいろな方が協力してくださる体制を作っていくのがいいだろうと思う。

【委員長】

今回のテーマではないが、PTAや子ども会、青少年育成市民会議という、既存の社会教育団体の統合再編、時代に即した形に再構築していくという作業が、どこかで必要だと思う。

【F委員】

私の周りでは、実際にコミュニティカフェなどをされている方が多く、先ほどおっしゃっていた元気な70代が講師になって、講座をされるなど、地域コミュニティの場にもなり、そこで、地域の人のつながりもできている。私も、6年前から、地域の会館で子育て支援を行っている。地域での子育て支援のつもりが、市から助成金をいただくことになったり、公民館でやってくださいと言われてたり、どんどん大きくなり、やめられなくなってきた。行政に何かをしてくださいではなく、今は、個人が行政を巻き込んでいくものと思っている。

【委員長】

元気な人と、行政をつなぐ役割を担うのが、中間支援機構であるが、マッチングがうまくいっていないことも多い。市民活動やNPOなどに携わる元気な方は、地縁型の組織と乖離してしまうことも多いが、原点は、地域コミュニティ、そこと元気な市民と、一緒になって活動していくことが必要だ。

【F委員】

草津市と元気な市民との間に立つコーディネーターがいらっしゃると、話がスムーズになると思う。

【委員長】

草津市では中間支援組織としては「コミュニティ事業団」があり、所管はまちづくり協働課だが、我々は、社会教育委員の立場から、一体何ができるのかと、「みらくるカレッジ」構想を提唱してきた。その真意は、F委員がおっしゃったとおりで、生涯学習課だけで完結する話ではない。

【E委員】

R委員がおっしゃったが、成果、何人参加されたか、どのような世代が参加されたか、といったデータを出し、分析することが大事だと思う。良い内容の企画であっても、成果が出されていないのはよろしくない。若い方に参加していただくには、例えば、子どもたちが消防車と一緒に写真を撮った後に防災カルタをするなど、わくわくするようなこととコラボし、うまく誘い水をかけることも重要だと思う。

老上西学区の「スマホやネットに潜む危険」というテーマは、時代に即している。今は、60代でもスマホを使われており、子どもたちを守るには、自分を守るすべも知っておかなければいけない。その方たち自身も一番知りたいことではないかと思う。

令和という時代になり、昭和時代のやり方を引きずってはいは、同じ様にはいかないと実感している。若い世代と交流したいという気持ちはあるが、広すぎて漠然と募集するよりは、ターゲットを絞った企画の方がよいのではないかと思う。

【C委員】

老上学区と老上西学区については、分離に関係した特殊な事情がある。老上学区は流入してきた人が多く、コミュニティはどうするかという危機感があり、パイロットモデルが求めるところとマッチングしたのだろうと思うが、他の学区にも当てはまるかという、難しい点がある。現役世代もリタイアされた方も、地域に貢献したい方が絶対にいるはずだが、それをうまくマッチングする人が大事で、ファシリテートする人の存在こそが大切だと共有できてないことが課題。つないでいくためのもうひとつ手間が重要だろうと思う。

このモデル事業で、うまくいっていると思うのは、学校と地域をつなぐ役割をしていただいただいたところだろう。子どもを連れていくということは、親がついている。そこで必要な交流が生まれ、新しい何かが生まれる可能性が十分ある。モデル事業が大事なのではなく、この事業を通して、人がつながっていく、つながっていく人たちが、また何かを生み出していく力を持っていると思う。この取り組みで出てきた、育ってきた人を大事にし、人をつなぐノウハウを他学区につないでいって欲しいと思う。

【副委員長】

今年から、地元のまちづくり協議会に関わることになり、組織改革や、継続性のあるまちづくり協議会をどう作っていくかという議論をしているが、人がいない、担い手がないと言いながら、いかに担い手をつくるかという議論が抜け落ちている。し

かし、地域の中で人材を発見していくことが人づくりの大きなポイントだろうと思う。データをという意見がでていたが、データが人材の発掘に結び付けられて、初めて地域の中で人づくりというのが生きてくるのではないかと思う。

地域での共同作業が徐々になくなってきており、世代間の知恵や知識を継承する力が弱っている。そういったものをどう伝承するかという点において、「みらくるカレッジ」のような仕組みで担っていかないと、いろいろ積み重ねてきたものが消えていくのではないかという危機感がある。

【委員長】

審議会などもあて職多いと感じることも多々あるが、本当にその組織で汗をかいている方を委員にさせていただきたいと思う。これは行政の努力次第で、人を発見していかないといけないと思う。

3. 報告事項

- ・ 各種審議会等への委員依頼について
- ・ 今年度スケジュールについて

4. 閉会
